

ライフラインとしてのランドスケープ 包括的な水系のデザインに向けて

Landscape as a Lifeline: Holistic Design for Water Management

武田 史朗* 片桐由希子** 福岡 孝則***

Shiro TAKEDA Yukiko KATAGIRI Takanori FUKUOKA

人類にとって、雨は天からの恵みであると同時に、いつ災害に転じるかわからないという脅威であり続けてきた。海もまた同じである。施工技術が進歩し、都市を取り囲むように防災施設が整備されたことで、河川や沿岸域における災害のリスクは、日常生活とは切り離されたところで制御されるようになった。しかしながら、3.11の津波被害をはじめ、豪雨災害の激化、多発するゲリラ豪雨によって引き起こされる内水氾濫は、これまで構築してきた水に対する防護が決して万全ではなく、その限界を超えた時には大災害が生じ得ること、そして予測し難い環境の変化が呼び起こす危機に、私たちの生活が常にさらされていることを改めて露わにした。

こうした大規模な自然災害や予測の不確実性を含む気候変動の影響に対する備えとして、堤防などの防災施設の設計や、生態系を基盤とした防災・減災（Eco-DRR）、河川沿いの土地での遊水機能の回復といった治水の考え方、東日本大震災後の復興のデザインにおける住民の避難計画や企業での危機管理体制の構築など、災害のリスクを受け止めながら、その影響を軽減するための環境を構築する取り組みが注目される。このような状況において、水をマネジメントするための空間を軸としながら、生態系や社会的なしくみと合わせてデザインされる、そうした環境を「ライフライン（命綱）としてのランドスケープ」と再定義することはできないか。

人口が減少するなかで、一斉に老朽化していくインフラの更新が必要となることに対し、ライフラインは水際だけ

でなく、流域圏での包括的な水系のデザインの下で構築されることが求められよう。この計画・デザインに関する意思決定の本質的なプロセスに対し、都市計画や造園分野の専門性や職能に求められるものは何か。

本特集は、不確実な将来に対する水管理を、政策立案とプランニング、多様なイニシャチブの協働、設計・デザイン、およびそれらのコミュニケーションという3段階のアプローチから、各国の先進的な事例や国内各分野の取り組みに学び、造園分野としてどのように取り組んでいくかを議論するものである。

第I部では、河川とその流域の自然と人間の共生のあり方を捉えるためのレファレンスポイントとして、早くから流域での総合的な治水と住民参加について提唱されてきた高橋裕氏に対して行ったインタビューを掲載し、第II部では海外の中長期的かつビジョナリーなランドスケープ政策の事例として、オランダの治水事業とアメリカのハリケーン・サンディーの復興戦略に焦点をあてる。

第III部は、国内の水に対する防災・減災のための施設や空間について、治水計画の変遷と都市形成の計画論、公共空間もしくは自然再生の場としての河川空間のデザインとマネジメント、そして、災害復興の現場における現状と課題についての報告を掲載した。

第IV部は、座談会形式で上記の議論を振り返りながら、Eco-DRRの取り組みにおける最新の動向を参考にしつつ、予測の不確実性をはらんだ水害リスクへのアプローチに、造園分野がいかにかかわるべきか議論する。

読者アンケートのお願い

編集委員会では、今後の誌面づくりの参考とするため、特集内容に関する学会員の皆さまからのご意見を募集しております。件名に特集タイトルをご記入の上、①氏名、②所属、③連絡先（e-mailなど）、④特集に関するご意見等（400字程度）を下記のアドレスまでご投稿ください。なお、ご記入頂きました個人情報につきましては適正に管理し、ご意見の内容に関する連絡等に利用させて頂く場合がございます。ご意見に対する個別の回答は致しませんのでご了承ください。

[読者アンケート送信先アドレス：hensyu@jila-zouen.org]

※第II部海外の取り組みについては、原文を学会ホームページにて公開いたします。詳しくは学会ホームページをご覧ください。

*立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 **首都大学東京都市環境学部 ***神戸大学 大学院工学研究科 建築学専攻